

## 20240513 ブログ④ 「なぜ勉強するの?」「何をしたいの?」

連休後半戦は、家族の体調不良もあり、床屋に行っただけで、こうしてつらつら文章を打ったり、映画などを観たりして過ごしました。特に、昨年度アカデミー賞視覚効果賞日本初受賞の「ゴジラ-1.0」は、映画館で見逃していたのでたっぷり楽しませてもらいました。

さて、いつもでしたら環境問題やSDGs関連の情報や私見を記事にしてきましたが、今回は、連休中に観たドラマから、教育について考えさせられたものをご紹介します。約20年前、2005年のテレビドラマです。

日本テレビ：土曜ドラマの「女王の教室」です。

この物語は

「悪魔のような鬼教師に  
小学6年の子供たちが戦いを挑んだ  
一年間の記録」

というのですが、瞬間視聴率30%越えを記録し、それ以上はかなり物議をかもしました。宝塚出身の天海祐希が鬼教師（阿久津真矢）として6年3組担任として赴任するという設定です。その中で、考えさせられる場面（第10話/11話）がありました。

「では授業を始めます。教科書の55ページを開いて。」

「先生!」ひかりが立ち上がる。

「何ですか?」

「私達、先生に質問があります。」

子供達を見渡す真矢。みんな、真剣な表情で真矢を見つめている。

「言っただらんなさい。」

「どうして勉強するんですか、私達。」

この前先生は言いましたよね。

いくら勉強して、いい大学やいい会社に入ったって、  
そんなの何の意味もないって。

じゃあどうして勉強しなきゃいけないんですか?」

「いい加減目覚めなさい。まだそんなこともわからないの?」

勉強は・・・しなきゃいけないものではありません。

したい、と思うものです。

これからあなた達は、知らないものや、理解できないものに沢山出会います。

美しいとか、楽しいとか、不思議だなど思うものにも沢山出会います。

そのとき、もっともっとそのことを知りたい、勉強したいと自然に思うから

人間なんです。  
好奇心や、探究心のない人間は人間じゃありません。  
サル以下です！  
自分達の生きているこの世界のことを知ろうとしなくて、  
何が出来ると言うんですか？  
いくら勉強したって、生きている限り、わからないことはいっぱいあります。  
世の中には、何でも知ったような顔をした大人がいっぱいいますが、  
あんなもの嘘っぱちです。  
いい大学に入ろうが、いい会社に入ろうが、  
いくつになっても勉強しようと思えば、いくらでも出来るんです。  
好奇心を失った瞬間、人間は死んだも同然です。  
勉強は、受験の為にするものではありません。  
立派な大人になる為にするんです。」

(中略)

「先生。」和美が発言する。

「何ですか？」

「先生言いましたよね。」

「この世で幸せになれるのはたったの6%だって。どうしてですか？」

「事実だから仕方がないでしょう。」真矢の声のトーンが少し落ちる。

「私はそうじゃないと思います。」

「どうして？」真矢が優しく問いかける。

「幸せって、人によって違うんじゃないんですか？」

みんな違う人間なんだし、

ここにいる24人には、24通りの幸せがあるんじゃないんですか？

サッカーやってるだけで幸せな人もいるし、

好きな人といるだけで幸せな人もいるし。

幸せって、決めるのは他人じゃなくて自分なんじゃないんですか？

私、ここにいる24人は、みんな幸せになれると思います！」

和美の言葉に小さく微笑む真矢。

「ずーっと・・・その気持ちを持ち続けられればいいわね。」

このドラマの中で、真矢先生は、「差別」「いじめ」「偏見」「懲罰」といった世の中の不条理を教室で再現し、その中で、自分の頭で考え、逞しく生きていく力を身につけさせようとしています。それは、今の教育界（過去もそうですが）では決して認めることのできない学級経営です。一見理不尽極まりない人権無視とも言える学級経営を管理職や教育委員にど

う思われようと、同僚からどんなに理解されなくても真矢先生は貫きます。その1年間という鬼のような教師との関わりの中で子どもたちがつかんでいったもの、それは個としての逞しさというよりも、仲間と本当の意味で心を通わせる中で生まれる深い自己肯定感だったように思います。また、その指導を振り返る時、真矢先生の凄まじいまでの深い愛と指導戦略を感じます。

ところで、問題を深く自分のこととして捉え、願いをもって行動することは、特活の得意分野でもあります。杉田洋先生も先日のご講演で、大縄跳びのエピソードをお話ししてくださいました。そこでは、「何をしたいの?」という問いが何度かあったように思います。どうしても跳べない仲間がクラスにいる。優勝したい。記録を出したい。でも全員で跳びたい。その葛藤の中で、「どうしたら勝てるだろう」という問いから、「本当に自分たちにとって大切なもの」は何なんだろうと、「問いの質」自体が変わっていきました。ただ単に「何をしたい?」という表面的な願いを拾い上げ、子どもに追求させる学びは、一見主体性を尊重しているようで、目指すゴールが甘く、一部のこどもの自己満足だったり、行き当たりばったりになったりすることが多いです。そうでなく、時に自分自身を追い詰めるような場面を経験させるなどして、願いや問いの質を深め高める過程にいざなう指導戦略が大切なのではないかと思います。その指導戦略を緻密に立てることも教師の力量だと思います。

昔の辛辣なドラマと杉田先生のハートフルなご講演は、イメージとしては真逆とも感じる内容ですが、その指導戦略と指導を貫く強い意志が自然とオーバーラップしてきました。「上の教室」は、有料動画サイトで再放送されていますが、無料の動画サイトでも名場面などをチェックできます。お時間があれば覗いてみてください。